

8月18日 使徒言行録16章16～40節

【解説と黙想】

フィリピでの宣教

占いの霊に取りつかれた人が、パウロたちにつきまとうようになりました。この箇所使われている「占い」という言葉は、ピュソーンという単語で、神々の託宣を受けることが出来るとされていたギリシアのデルフィ（デルフォイ）という町の蛇の名前です。その霊を受けた人は、神々の考えを受け取る力を持っているとされていたのです。このピュソーンという単語は聖書の中ではここにしか使われていません。今日の日本でこの霊を信じている人は恐らくいないでしょう。しかし日本で占いは大流行りです。

確かに現代において科学技術の発展は著しく、皆その恩恵を受けています。しかし人は、科学の力では押しとどめることが出来ない邪悪な力を感じ、恐れを抱いています。そうした漠然とした恐れが、人々を占いに頼ろうとさせているように感じます。

占いとは、一定の徴を解釈することによって、人が通常では知りえないことを知ろうとする行為です。それは人知を越えた知識を知ろうとすることで、人の限界を越えようとする事です。それゆえに人には大変魅力的に映りますが、人としての分を踏み外す行為です。

占いに手を出すのは、大抵の場合、軽い気持ちからです。本気にするわけではないし、単なる参考として聞くだけだ、と思っているのですが、占いの言葉は権威を持ってしまいます。「あなたには不幸なことが起こります。そうならないためにはこうしなさい」と言われたら、つい聞き従ってしまうのです。そのようにして多額のお金を出してしまう例は少なくありません。

占いはお金になります。現在、占いアプリは大流行りです。若くて優秀な技術者を抱えた日本有数のIT企業が占い事業に精を出しています。もはや占いは、怪しげなものではなくて、スマートなものとして認知され、高収益事業として高く評価されています。しかし占いは人の心を操り、支配し、神様に目を向けることを妨げさせるものです。

占いの言葉は人を安心させるものだと言いがちです。しかし結局それは人を恐れのかん縛から解放するものではありません。現代は、知らず知らずの内に、このような占いの霊に取り込まれてしまっていると言えます。そういう世界にキリストの福音が与えられていることの意味を見つめる必要があります。(常石召一)

《参照箇所》 ガラテヤの信徒への手紙4章8, 9節

《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」問16

8月18日 使徒言行録16章16～40節

【説教展開例】

フィリピでの伝道

◇..... 単元のねらい◇

日本では占いが大変好まれています。これほど占いが流行っているのは、人々が何かを恐れ、本当は心が穏やかではない証拠と言えます。パウロはそれを「神ではない神々に奴隷として仕えている」（ガラテヤ4：8）と言っています。私たちはそこから解放されなければならないのです。イエスさまをそのような私たちをどう取り扱われるのでしょうか。

「主イエスを信じなさい」

パウロは、イエスさまに救われて、福音の素晴らしさを人々に伝えたいと思いました。それが、神さまが自分に望んでおられることだとも思いました。そしてパウロは第二回目の伝道旅行に出かけ、海を渡ってフィリピという町に行きました。そこに占いをする女の人がありました。

テレビでは占い師が時々登場しています。占いコーナーというのもありますね。占いというのは、普通の方法では人間が知ることが出来ない事柄を、ある徴によって知ろうとすることです。その徴とは、カードだったり、手相だったり、星の動きだったりします。その他にも昔から様々な方法があります。しかし占いは聖書では禁じられています。なぜでしょうか？ そのような徴を解釈しても人間には未来は分からないからです。また占いは、人間が本来持っている力以上のものを手に入れようとする企てです。人間に許された範囲を越えようとする事なのです。結局、人間が神のようになろうとすることであり、神さまを不要とすることに繋がるのです。それは救いを神さまから頂くのとは正反対の行為です。

占いをしてもらうとどのような気持ちになるのでしょうか。「良いことが起こるよ、長生きするよ」と言われたら嬉しくなります。逆に「あなたには悪いことが起こる」と言われたら不安な思いになります。気にしないようにしようと思っても、どうしても気にしてしまいます。「悪いことが起こらないためにはこうしなさい」と言われたら、つい「それをやった方が良いのではないか」と思ってしまいます。このように占いは、初めは軽い気持ちで受け止めていても、やがてその言葉が心の中で大きな位置を占めてしまうのです。

フィリピの町にいた占い師は「不幸になりたくなかったらお金を持って来なさい」と言っていたのでしょうか。その言葉に逆らえなかった人たちは言われた通りにしました。実はこの占い師は奴隷でした。主人たちに働かされていたのです。そのお金は主人たちの所に入っていました。

さて、パウロは、その女奴隷に向かってこう言いました。「イエス・キリストの名によって命じる。この女から出ていけ」。するとこの女の人から占いの霊が出て行きました。それは悪い霊から自由になったと

いうことです。しかしお金儲けをすることが出来なくなった主人たちは大変怒りました。そこで彼らは役人たちを巻き込んで、パウロとシラスに復讐してやろうと思いました。その作戦はうまくいき、二人を牢屋に放り込むことに成功しました。しかも決して逃げられないように、最も奥の牢屋に入れることが出来たのです。パウロたちは暗くて酷い所に押し込められました。しかしそれでもパウロたちの心は自由でした。イエスさまによって、それまで自分を苦しめて来たものから自由にされて、天国に行くことが出来るようにされたことの喜びは、牢屋に入れられたからといって消えるようなものではなかったのです。

さて真夜中になりました。パウロたちは讚美歌を歌っていました。他の囚人たちは誰もそれを「やかましい」と言って止めさせようとしませんでした。聞き入っていたのです。その讚美歌に心慰められていたのでしょう。そのような時、突然地震が起きました。牢屋の戸は全部開き、囚人を縛っていた鎖も外れました。全ての囚人が逃げ出せる状態になりました。彼らは逃げたのでしょうか。実は誰も逃げなかったのです。それはパウロとシラスが逃げなかったからではないでしょうか。パウロたちが逃げな

かったのは、自分たちが逃げると困る人たちがいたからです。それは看守です。看守というのは囚人たちが逃げないように見張る人です。囚人たちが逃げたら、その責任として自分の命を差し出さなければならぬのです。

看守は、気が付いたら牢の戸が全て開いているのを見て「囚人たちは逃げてしまった。自分は命と引き換えに責任をとらなければならない」と思いました。そして覚悟を決めて自殺をしようと思いました。しかし、その時、「私たちは皆ここにいる」というパウロの大きな声が牢屋中に響きました。看守はびっくりしました。その声は、もう生きる望みが途絶えたところで、生きることを可能にしてくれる救いの声でした。看守は、パウロの中に本当に自由にされている、救われている人の姿を見たのです。そして自分もパウロのようになりたいと思いました。それで看守は「救われるためにはどうすべきでしょうか」と聞きました。するとパウロたちは「イエスさまを信じなさい。そうすればあなたも家族も救われます」と言いました。こうして看守と家族はイエスさまを信じて救われ喜びました。イエスさまはこのように、私たちをも含めて、自由にして下さるのです。 (常石召一)

《今週の暗唱聖句》

「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか。」二人は言った。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」(使徒言行録16章30, 31節)

8月18日 使徒言行録16章25～34節

【幼稚科】

フィリピでの宣教～牢看守の家族伝道～

〈ねらい〉

おはなしを牢での伝道にしぼって、パウロとシラスの伝道の順序過程に注目する。

〈展開例〉

ある夜、牢に入れられたパウロとシラスの¹賛美とお祈りを囚人たちが聞き入っていました。突然、²大きな地震が起こって牢が揺れて、牢の戸が開き、囚人の鎖も外れました。牢の看守は囚人たちが逃げてしまったと思いあわててしまいました。パウロは大声で、「わたしたちは皆ここにいる」

と叫びました。看守は牢の中に飛び込み、二人の前に震えてひれ伏して、言いました。³「救われるためにはどうすべきでしょうか」、と。二人は、⁴「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」、と言いました。そして、看守とその⁵家族全員に主の言葉を伝えました。⁶看守は二人の傷を手当てし、すぐ家族と一緒に⁷洗礼を受けました。そして、二人は看守の家で、⁸食事をして、家族とともに皆で喜びました。



〈おはなし順序ならべ〉
 八つの絵を切り取り、左上のかな(カナ)文字を並べて、ばらばらに置きます。お話の順序に絵を並べましょう。(正解なら、左上の文字が「フィリピでんどう」の順番になります。)

8月18日 使徒言行録16章16～40節

【小学科上級・中学科】

フィリピでの伝道

1. 使徒言行録16：16～23を読みましょう。

①「わたしたち」は祈りの場所に行く途中、誰に出会いましたか。その人はどんな人で、パウロや「わたしたち」に何をしましたか。

②パウロはその人にどう対応しましたか。その時のパウロの気持ちはどうだったでしょうか。

③パウロの対応により、どんなことが起こりましたか。その結果、どうなりましたか。

2. 使徒言行録16：24～27を読みましょう。

④牢に投げ込まれた時の彼らはどんな状態でしたか。こうなったことを、彼らはどう思っていたでしょうか。

⑤牢で何が起こりましたか。看守とそこに囚われていた人たち、パウロたちはどうしましたか。

3. 使徒言行録16：28～40を読みましょう。

⑥看守はどのように変わりましたか。このことについてどう思いますか。

⑦高官たちは何をしようとしてしましたか。パウロたちはそれに対してどうしましたか。なぜそのようにしたと思いますか。

8月25日 使徒言行録17章16～34節

【解説と黙想】

アレオパゴスで語る

1. 状況

パウロは第二次伝道旅行の最中にある。コリントの町を目指していたパウロは、その道すがら、アテネに立ち寄る。アテネはギリシア文化を色濃く刻んでいる町。至るところに偶像が並んでいた。そこで、パウロの伝道魂は燃え始める。

2. パウロの現場

パウロはこれまで主に「ユダヤ人の会堂」で御言葉を語ってきた。集う人々は御言葉に親しみ、その奥義を求める人達であった。

しかし、今回は違う。相對するのは、ギリシア文化に親しむ知識人であり、彼らは御言葉を知らない。アテネはパウロにとって“完全アウェイ”の場であった。

3. アレオパゴスの真ん中で

パウロはアレオパゴスに連れて行かれる。そこは裁判所、教育機関、行政機関を兼ねたような場所であった。いつもとは勝手が違う場所でもパウロは語るべきことを語った。偶像を拝む愚かさ、万物の創造主なる神をこそ求めること。その神は神を求める者の近くにあってくださること。だからこそ、今、悔い改め、神に立ち帰らなければいけないこと。一人の方を通した裁きの日と、復活による確証。パウロは福音の中心を語っている。福音が伝わるために手段も選んでいない。人々の神観、世界観に寄り添い、ギリシアの詩人エピメニデス

とアラトスの詩(28節)も引用した。

しかし人々の反応は芳しくなかった。ある者はあざ笑い、ある者は多少の関心を示しつつも「いずれまた聞かせてもらうことにしよう」(32節)とその場から消えた。一方で、「信仰に入った者」(34節)も数人いたという。何が彼らを分けたのか。

4. 福音を聞くということ

人々を分けたのは、「死者の復活」に対する態度であり、その「復活」を実現させた神に対する悔い改めの心だった。

アテネの知識人たちにとり、死した人間が復活することは愚かな話であった。靈魂の不滅を信じる彼らはその知恵の枠からでることをしない。彼らにとり知恵は神を志向することの上にある。そこで悔い改めは起きない。聖霊は働かれない。聖霊は低くなる心に、砕かれた魂に働いてくださる。

その光景を、私たちはパウロの説教を聞き続け、神を信じた人たちの姿に見ることができる。詳細は記されていない。それでも、偶像が立ち並ぶ町の中でパウロが語るべき福音を語った時に信じる者が起こされたことは驚くべきこと。聖霊は自由なるお方。そのお方が御言葉を通して力を振るわれる時、信じる者は必ず起こされる。

その力に守られて福音を語り、福音に生き続けることへと、私たちは召されている。
(柏木貴志)

《参照箇所》 コリントの信徒への手紙一1章18節～2章4節

《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」問35、49